テーマ：インバウンド観光のこれから

講　師：矢ケ崎 紀子氏（東京女子大学 現代教養学部 国際社会学科 教授）

日　程：2024 年 1 月 16 日

国際基督教大学教養学部社会科学科卒業後、住友銀行入行。日本総合研究所上席主任研究員を経て、九州大学大学院法学府政治学専攻修士課程修了。国土交通省観光庁発足時に参事官（観光経済担当、官民人事交流）。首都大学東京都市環境学部特任准教授、東洋大学国際観光学部准教授・教授を経て、2019 年から現職。国土交通省交通政策審議会観光分科会長（2019 年～ 2023 年）を務める。専門分野は観光政策論及び観光産業論。

コロナ前 2019 年の訪日外国人旅行者（以下、インバウンド）は 3200 万人弱。日本人海外旅行者（以下、アウトバウンド）は 2000 万人。日本人国内旅行は 6 億人弱であった。

一般的に、定番・人気の場所に人が集まるが、創意工夫により地方へ誘客するという点に、国や自治体の観光政策が絡んでくる。観光を盛んにし、交流人口を増加させ、地域の活力を取り戻そうとする動きである。観光客が地域固有の価値に対して支払い、観光客の目線を通して自分の地域を見直し、シビックプライドが醸成されるという良い循環ができる。しかし、観光を活用するには幅広い知識が必要であり、マーケティング・不動産・金融等、地域の事業者間を繋ぎ、推進する組織を作る必要がある。

また、新型コロナ等予期しないことで観光客数は変動するため、特に旅行消費の単価アップと域内循環が大事である。自分自身の変化、視野を広げる、学ぶを目的とするアドベンチャー・トラベルを好む方々等、相応の値段で相応の価値経験を買う上客をみつけること。そして、地域の中で観光消費を回すことが大事であり、その中核となる宿泊産業がしっかりお金を回す力をもつこと。

特に余暇を使う観光客は交通の便が重要である。インバウンドとアウトバウンドが拮抗しているところで国際定期航空路線が張られるが、日本はアウトバウンドが少ない。インバウンドをサステナブルにするため上記に加え、アウトバウンドも積極的に行っていく必要がある。

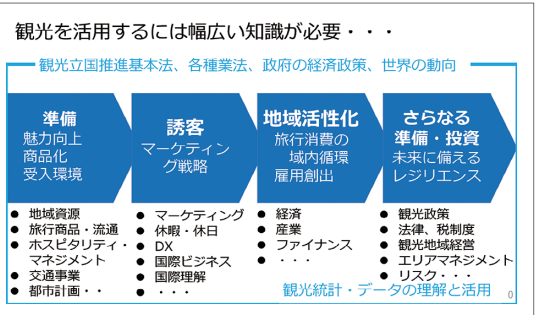

図 3　観光活用に必要な知識

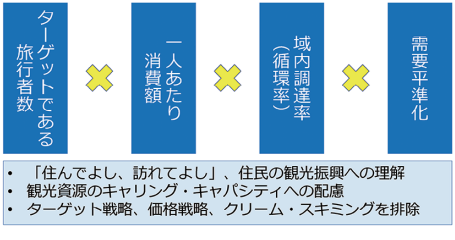

図 4　旅行消費の単価アップと域内循環の必要性

図 3 及び 4：東京女子大学 矢ケ崎 紀子氏